

## 書評

# 「やさしさ」の本当の意味とは

書評： 義永美央子・山下仁編. 2015.

『ことばの「やさしさ」とは何か： 批判的社会言語学からのアプローチ』東京： 三元社.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程  
寺田葉菜

本書は、従来の社会言語学を批判的に捉え直し、新しい価値観を提供しようとする 8 人の筆者により、「やさしさ」について改めて考え直すきっかけを示している。編者は日本語教育学と応用言語学専門の義永美央子と、社会言語学とドイツ語学専門の山下仁である。山下は本書を、野呂・山下(2001/2009)、植田・山下(2006/2011)の続編と位置付けている。

本書は「はじめに」、第 1 章から第 8 章、「おわりに」の全 10 部から成る。

「はじめに」では、3.11<sup>1</sup>を境に「言葉と現実の関係」が崩れたと述べ、これまでの「やさしさ」を批判的に捉えなおし、新たな「やさしさ」を模索しなければならないと問題提起をしている。

第 1 章では、従来の日本語教育とこれからの日本語教育の方向性についての説明がなされる。前者は、日本語の非母語話者に対して日本語の規範や日本語母語話者の行動様式を教え、日本における社会参加を促進するものであった。それに対して、日本語教育での「母語」の考え方に問題があるとする田中(2000)の主張が紹介される。つまり、今後の日本社会に必要なのは、母語話者である日本人の側が「じぶんの位置取りのもつ力関係を認め、みなおす」ことであり、「日本人による日本語の学び直し」が日本語教育における新たな「やさしさ」として提示されている。

第 2 章と第 3 章では、日本語教育の中の個別の問題が取り上げられる。まず第 2 章では、経済連携協定(EPA)に基づき来日したインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者に関する問題が取り上げられ、これまで候補者たちに対してなされてきた政治的配慮や試験の際の言語的な配慮が、候補者たちに対する「やさしさ」であるという肯定的な見解が示される。

続いて第 3 章では、言語使用の実態に潜む敬語意識の問題が取り上げられる。茨城県で行ったアンケートによる敬語意識調査を基に、ホスト社会の住民である日本語母語話者と外国籍住民が自己及び他者の敬語をどのように捉えているかという、敬語使用の意識と評価の問題が取り上げられている。考察において、外国籍の人々を社会に適応させる対象としてではなく、社会や、社会で用いられることばの変容と共に関わり共にそれらを創り上げていく言語話者として捉える視点が必要であると主張される。

第 4 章から第 6 章では、日本語の変種と「やさしさ」の関係を論じている。第 4 章では、医療現場における「方言」の使用が、医師—患者関係の観点から論じられている。この二者の関係

<sup>1</sup> 本稿では、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災をこのように記す。

は「専門用語」と「共通語」によって保たれるが、「専門用語」をできるだけ使わないようにし、「共通語」から「方言」にシフトすることで、そのコミュニケーションは「優しい」ものになるに違いないと主張している。

第 5 章では、「聞こえない・聞こえにくい」子どもたちに対するろう学校における教育方針の問題が「やさしさ」との関連で議論されている。かつての日本語教育と同様に、ろう者に対しては発声や口形の読み取りで意思疎通を図ろうとする口話主義が取られ、彼らのための変種である「手話」は軽視や否定をされてきた。その経験から本章では「『やさしさ』が語られる時、それは誰にとつての、または誰からみた『やさしさ』なのかという視点をもつことが必要である」と指摘される。

第 6 章では多言語表示に用いられる言語変種のうち、何らかの理由で一般的な言語規範から逸脱した言語表現の問題が扱われる。「逸脱」や「不正確さ」の特徴や種類が分析され、その意味が検討されている。

第 7 章では、原発推進派と脱原発派のそれぞれのコミュニケーションの特徴を比較検討し、新たな談話のあり方を考察している。原発事故の経験と批判精神から、「原子力発電所を推し進める」、「支配的な談話」に対し正面から抵抗しようとする方向と、そのような談話と衝突するのではなく、異なる価値観を提示しようとする二つの方向が示されている。

第 8 章では、3.11 当時の在住外国人の経験とその内面的な感情の変化や留学を続ける決意が取り上げられる。3.11 を首都圏で経験した留学生に対して、筆者の松本がインタビューを行い、そのライフストーリー分析から読み取れる、多面的で複合的なアイデンティティを記述している。

「おわりに」では、編者が本書の執筆を振り返り、「やさしさ」の中に潜む独善性やあやうさは自分たち一人一人の問題であると自戒を込めて述べている。

評者は、本書の主な論点として「日本人による日本語の学び直し・作り直し」を挙げたい。

まず第 1 章において筆者は、従来の日本語教育について、学習者が日本語をいくら勉強しても、結局日本語母語話者の規範やそれに従った振る舞いまでもができる「日本人」にはなれず、いつまでも何かしら欠落感を抱え続ける者が多くいると指摘する。そのため、今後の日本社会に必要なのは、外国人に対するエンパワメントよりもむしろ、マジョリティである日本人がまず日本語について見直すことだと述べる。

また、第 2 章において、看護・介護の分野は特殊な分野だと考えられがちだが、第 1 章の主題「日本人による日本語の学び直し」の論点が当てはまると筆者は述べる。日本人と同じ試験を受けるという「国家試験の見直し」、「やさしい日本語による教材作成」、「外国人との話し方」などが義永(2015)の言う「学び直し」にあたるとしている。また、「共生日本語」を医療現場の日本語に重ね合わせることも可能だろうと考察している。

これらの姿勢は、「やさしい日本語」を標準日本語ではない別の変種の日本語と捉えることと似ていると評者は考える。「やさしい日本語」の使用に対して、「外国人をばかにしている」、あるいは「威厳がない」という声がかかることが多々あるが、それを変種という意味で他言語として捉えたとき、日本人も外国人も対等な立場にすることになるため、そのような批判は意味を持たなくなる。むしろこのような捉え方は、マジョリティの日本人による差別や偏見を助長する危険が十分に考えられる。しかし同時に、日本語母語話者の規範や振る舞いに同化させるという従来の日本語教育を見直す第一歩になるのではないだろうか。

また岡崎(1994)は、共生概念を動的な概念として過程的に捉えたうえで、日本語を共生言語として形成していく過程が重要であると主張する。筆者は、「このような『新しい日本語』は日本人だけのものではなく、日本人側もこの運用を学んでいかなければならない」と主張している。つまり、従来の日本語教育のように「日本人だけのものである日本語」を学習者に押し付けるような教育ではなく、言葉の運用をも日本人と学習者と一緒に考え、学んでいく「新しい日本語」が必要であると言うのである。後者は、まさに「やさしい日本語」に対して私たち日本人が取るべき行動であると考えている。この行動は、日本人が半ば無意識に行っている日本人／外国人のステレオタイプ構築(Ohri2005)を客観視することができる。そのため、ステレオタイプを見直すきっかけになり、本当の「やさしさ」を見出せるのではないかと考察する。

加えて、日本語母語話者が姿勢を改めることは、「簡単・わかりやすい」と無意識に感じて使っていた言葉の使い方を見直すきっかけにもなるだろう。そのような言葉として、日本語のオノマトペが挙げられる。日本語の母語話者にとっては物事の状態や人の感情を端的に表すことができるため、便利な言葉として多用する傾向にあるが、日本語非母語話者にとってはかえってわかりにくい表現である。このことも根底には、従来の日本語教育が持っている「同化主義」が現れたものではないかと考える。つまり、母語話者にとって分かりやすいものは、誰にとっても分かりやすいと思い込んでいるあまり、それを「常識」として他者にも押し付けてしまっているということである。実際に、医療を含め様々な分野において外国人受け入れの際に多くの課題が出てきている。そのため、今こそ母語話者側が立ち止まり、「日本語」に対して批判的なまなざしで見えてみるべきではないだろうか。

最後に、本書の肯定面を三つ、一方で否定面をひとつ挙げたい。適切な章立てがされ、章ごとの分量も読みやすい点、「やさしさ」というひとつのテーマを、多角的に検討や議論がされている点、日本語教育を学ぶ学生にとって問題意識を発見することができる点は評価できる。しかし、日本語の見直しにより「やさしい日本語」や「新しい日本語」に対する日本人側の偏見を助長するリスクも考えられる。このような批判的意見が少ない点に関しては改善を求めたい。

- Ohri, R. 2005. 「『共生』を目指す地域の相互学習型活動の批判的再検討: 母語話者の『日本人は』のディスコースから」『日本語教育』126:134-43.
- 植田晃次・山下仁編. 2006/2011. 『「共生」の内実: 批判的社会言語学からの問いかけ』東京: 三元社.
- 岡崎敏雄. 1994. 「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化: 日本人と外国人の日本語」『日本語学』13(13):60-73.
- 田中望. 2000. 『日本語教育のかなたに: 異領域との対話』東京: アルク.
- 野呂香代子・山下仁編(2001/2009)『「正しさ」への問い: 批判的社会言語学の試み』東京: 三元社.
- 布尾勝一郎. 2015. 「EPA 看護師・介護福祉士候補者への『配慮』の諸相」義永・山下編. 2015. pp.45-71.
- 義永美央子. 2015. 「日本語教育と『やさしさ』: 日本人による日本語の学び直し」義永・山下編. 2015. pp.19-43.